

<論文>

「時代」を象る二つの遺灰 —新生チェコ共和国における第二次世界大戦戦勝 65 周年記念式典より—

坂田 敦志*

要旨

2014年2月のロシアによるクリミア半島制圧およびその後のウクライナ東部の一連の情勢に見られるように、1989年の「冷戦」終結以降、旧社会主義圏は一段と混迷を深めている。本稿では、ネーションをめぐる諸力が国家の枠組みを超えて錯綜するこの圏域にいかにかアプローチするかという問題意識の下、「ポスト社会主義の優等生」と目され、西側諸国が先導するネオリベラリズム路線を着実に歩んでいるかに見えるチェコ共和国において、「ポスト社会主義」と括られる新しい時間・空間が実際にはどのように生成され、生きられているのか、その一端に迫る。

具体的には、1989年の体制転換から二十余年が経過した2010年5月8日にプラハ郊外ヴィートコフの丘で催された第二次世界大戦戦勝65周年を祝う国家式典において、相反する二つの「時代」を背負った無名戦士の遺灰がヤン・ジシュカの騎馬像下部の霊廟内に並置された出来事を題材に、この出来事に、葬り去ったはずの「歴史」の痕跡を見出すことで、チェコ史における様々な「時代」、様々な文脈、様々な対立軸を組み直しながら進展する「歴史」をめぐる闘争が、二つの遺灰を基点に焦点化され、組織化されるさまを素描する。

キーワード： 「ポスト社会主義」、チェコ共和国、ヴィートコフの丘、無名戦士の遺灰、「歴史」をめぐる闘争

目次

- I はじめに
- II 記憶の政治史
 - 1 建国神話としての「ズボロフ」
 - 2 「ズボロフ」から「ドゥクラ」へ
- III 「神のいない寺院」—体制転換以前のヴィートコフ—
 - 1 乱立する記念碑

*一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

2 ゴットワルトの遺体

IV 「時代」を象る二つの遺灰

- 1 空白の十年間
 - 2 二つの遺灰の出会い
 - 3 「東」の亡霊
 - 4 「歴史」をめぐる闘争
- V おわりに

I はじめに

1989年の体制転換に端を発する騒乱が一段落した2010年11月、チェコ共和国プラハ郊外の丘にひっそりと一つのカフェがオープンした。洗練されたデザイン、紫を基調とした明るい店内からはプラハ市街地が一望でき、西側からの観光客たちがゆったりとカップを傾けている。しかし、体制転換後の東欧圏がどこでもそうであるように、「西」には「東」の影が、「現在」には「過去」の影が忍び寄る。このカフェにしても、その西側的なスタイリッシュな外見の背後に、ドイツとソ連にまつわるグロテスクな「過去」が潜んでいる。カフェ・ヴィートコフと名付けられたこのカフェはヴィートコフ国民記念館 (*Národní památník na Vítkově*) 内部に新たに併設されたものであり、前庭に聳え立つ世界で三番目のサイズとされるヤン・ジシュカ将軍の巨大な騎馬像 (*Jezdecká socha Jana Žižky z Trocnova*) を仰ぎ見、さまざまな「時代」を孕んだ展示品が配置された厳かな空間を通過した後では、このカフェがその澄ました外観とは裏腹に、どのような「歴史」を背負わされているのかに思いを馳せざるを得ない。

カフェのオープンから遡ること半年ほど前、ヴィートコフ国民記念館前の広場で一つの国家式典が催され、ヤン・ジシュカの騎馬像の台座内部に設けられた霊廟内に二つの棺が並置された。二つの棺の一方には、第一次世界大戦下、ズボロフの戦い (*Bitva u Zborova*) で犠牲となった無名戦士の遺灰が、もう一方には第二次世界大戦下、ドゥクラ峠の戦い (*Karpatsko-dukelská operace*) で犠牲となった無名戦士の遺灰がそれぞれ納められていた。正確には、これら二つの棺はこのとき同時に搬入されたわけではない。もともとジシュカ像の台座内部の霊廟には、社会主義期よりドゥクラ峠の戦いで戦死した無名戦士の遺灰を納めた棺が安置されており、1989年の社会主義政権の崩壊を受けてヴィートコフ自体がプラハの公的領域から消し去られた後もひっそりと生き延び続けた。2010年5月8日に催された第二次世界大戦戦勝65周年を祝う国家式典において、この棺の隣にズボロフの遺灰を納めた棺が新たに搬入され、ヤン・ジシュカ像下部の霊廟内に二つの遺灰を納めた棺が並置されることとなった。

二つの遺灰が並置されたこと、そしてそれがヴィートコフのヤン・ジシュカ像の下であったということに、どのような意味があるのでしょうか。ズボロフの遺灰が、体制転換から二十余年が経過した 2010 年の第二次世界大戦の戦勝記念日に、社会主義期の記憶と切り離せないドゥクラ峠の遺灰の隣に搬入されたことの背後にどのような政治的意図があり、その意図は当地のいかなる社会的状況に動機付けられているのでしょうか。

中・東欧近現代史家の篠原によると、社会主義期に形成された共産党政権による公式史観の核心は第二次世界大戦の評価にあり、第二次世界大戦の勝利は「最終的に国民的解放と社会革命に帰結すべきもの」[篠原 2006: 296] として提示されたという。「パルチザン闘争から、戦後の社会革命、人民民主主義体制の建設、共産党の一党独裁までの流れは一連のものとして理解され、第二次世界大戦をはさむ、『反動的過去』と『革命的未来』との鮮明な二分法が歴史像の基調となっている」[297]。

ところが、1989 年、社会主義政権が崩壊すると、「社会主義時代の公式史学が用意する歴史像」は問いに付されることとなり、『『歴史をめぐる内戦』とでもいってよい事態がもたらされた」[298]。「第二次世界大戦はもはや国民的解放のための聖なる闘争ではなくなり、多様な宗派・宗教、言語、民族集団が数世紀にわたって共存してきた中・東欧の歴史的景観を一変させ、『最小限の空間に存在した最大限の多様性』が失われた破局として描かれるようになった」[298]。1989 年の体制転換によって現れた新しいスタンスは、「多文化的で、多元的な『伝統』への回帰、争いあった諸集団の和解といったモチーフに導かれ」、「歴史的概念としての『東欧』を葬り去る努力の一環をなしている」[299]。

本稿は篠原が示した構図に依拠しつつ、1989 年の体制転換後、「歴史をめぐる内戦」[298] がどのように展開しているのか、その一端を二つの遺灰をめぐる一連の出来事の中に読み解こうとする試みである。ヴィートコフの丘、ヤン・ジシュカの騎馬像、そして二つの遺灰は互いに関連し合いながら、一連の出来事を構成している。そして、これらが関連し合う仕方は、各々がどのような「過去」を蓄積してきたかという点に依っている。したがって、二つの遺灰をめぐる何が起きているのか、その背後にどのような意図が働き、そこにおいてどのような「歴史」が作られつつあるのかを読み解くには、この一連の出来事を構成する各々のエージェントがいかなる「過去」を蓄積してきたのかを確認しておく必要がある。ヴィートコフの丘、ヤン・ジシュカの騎馬像、そして二つの遺灰は、いかにして体制転換後の政治的实践を構成するエージェントとなり得たのであろうか。まずは、この問いをチェコスロヴァキア第一共和国 (*Československá První Republika*) の政治史の中に探してみたい。

II 記憶の政治史

2010年5月8日のヴィートコフでの式典における当時のチェコ共和国大統領ヴァーツラフ・クラウスの言葉にあるように、チェコスロヴァキア第一共和国の誕生は第一次世界大戦の副産物であった。1918年、エドヴァルト・ベネシュ、トマーシュ・マサリクらによってチェコスロヴァキア国民委員会が設立され、同年6月29日、連合国が同委員会を「将来のチェコスロヴァキア政府の基礎」と承認、10月18日、国民委員会がワシントン宣言を行い、マサリクを初代大統領とするチェコスロヴァキア暫定政府を設立、同月28日、国内の国民政府が独立宣言を行い、プラハ政府庁舎を占拠、ハプスブルク帝国からの独立を達成した。

独立したばかりの若い国家は大戦後の混乱の中で、早々に国民国家としての体裁を整える必要があった。こうした中、新生国家の正当性を主張する上で重要な役割を果たしたのがチェコスロヴァキア軍団 (*Československé legie*) である。この軍事組織は第一次世界大戦においてロシア軍の捕虜となったチェコ人、スロヴァキア人から構成され、ロシア革命直後、対独戦線の尖兵としてメンシェビキ政権によって設立された。「軍団」による最も輝かしい戦勝のひとつがズボロフの戦いであり、戦間期を通じて第一共和国の重要な建国神話のひとつとなっていく。

ズボロフの戦いが第一共和国の起源にかかわる戦いであったのに対して、1948年2月、第二次世界大戦後に成立した共産党政権の下ではドゥクラ峠の戦いが同様の位置を占めることとなる。この戦いは第二次世界大戦におけるスロヴァキア民族蜂起 (*Slovenské Národné Povstanie*) に端を発する対独パルチザン闘争の一つであり、大戦後、共産主義イデオロギーを軸に東欧圏が結束していく過程で象徴的な役割を果たした。本章では、第一共和制期、ナチス占領期、ポスト大戦期、社会主義期と時代に応じて「ズボロフ」および「ドゥクラ」の記憶がどのように書き換えられていくのかを辿る。

1 建国神話としての「ズボロフ」

ズボロフは現ウクライナ西部に位置する小さな村である。1922年6月、この地から160体にのぼる無名戦士の遺骨がプラハへと列車によって移送された。1917年7月2日にこの地で起こった戦闘で犠牲となったチェコスロヴァキア軍団の無名戦士の遺骨である。ソコルの構成員たちによる熱烈な祝福を受けながらプラハ本駅に到着した遺骨は、ヴァーツラフ広場の国民博物館に運び込まれ、一時そこに保管された。1922年7月1日、チェコスロヴァキア軍団退役軍人会の会員やソコルの構成員らによって国民博物館から旧市街広場へ運ばれ、市民ホールのチャペルに埋葬された。同日、政府高官や議員、市民団体のリーダーなどが見守る中、皇帝の戴冠式を模した壮麗な儀礼

が執り行われ、翌7月2日の朝、軍団の退役軍人やソコルの構成員らが参列する中、軍事パレードが挙行された [Wingfield 2003: 662, 671]。

ウィングフィールドは戦間期に「ズボロフ」が果たした役割を跡付ける中で、戦争に関する記念碑の系譜を辿りながら、新たに戦死者の記念碑が登場したこと、そして記念される対象として無名戦士が含まれるようになったことに注意を促している [660]。第一共和国の英雄はハプスブルク帝国凋落期から水面下で建国への道筋をつけたマサリクとベネシュだけではない。チェコスロヴァキア軍団に所属し、対独戦線で戦死した無名戦士たちも「自らの命を将来の国民国家のために投げ打った」ことから「建国の父」としての位置付けを獲得し、ズボロフの戦いは匿名の「志願兵による偉大なる達成」という意味付けを与えられていくこととなる。

重要なのは、ズボロフの無名戦士たちが戦間期の公的言説を占有していく過程で、「近代」を「中世」と結び付け、ナショナルな対立を宗派对立と重ね合わせる媒介項としての役割を果たしていたという点である。ヨゼフ・ザチェクによると、「新生チェコスロヴァキアの国境はもっぱら民族自決の原理に基づいて引かれたものではなく、「歴史的、『自然的』境界および経済的、戦略的原理をも考慮して引かれ」たものであったため、「チェコスロヴァキアは多民族国家としてのハプスブルク帝国の縮図のような様相を呈するようになった」 [ザチェク 1981: 155–156] という。具体的には、「大ざっぱに言って、七百万人のチェコ人、二百万人のスロヴァキア人、三百万人を超えるドイツ人、七十五万人のハンガリー人、五十万人のルテニア人、八万人のポーランド人が住むことになった」 [156]。ハプスブルク帝国の多民族状況を引き継ぎながら早晩に国民国家を成立させなければならなかったことから、チェコスロヴァキアという枠組みの正当性をいかに表現するかということは第一共和国の首脳陣にとって重要な課題の一つであり、この課題を克服するための手段の一つが民族的な構図を宗教的構図によって補強するという方法であったと言える。

この宗派对立の起源は15世紀まで遡る。ウィクリフの影響を受けた説教師ヤン・フスによってボヘミア地方一帯に広がりを見せた宗教改革の影響を危惧したローマ教皇の指令を受けた皇帝ジグムント軍とフス派軍との間で十数年に渡って行われた宗教戦争がそれである。この一連の出来事を「ドイツ人」と「チェコ人」の民族対立と捉える視点は、19世紀初頭に端を発する民族復興運動 (*Národní Obrození*) の進展の中ですでに確立されており、第一共和国も己の枠組みを正当化するにあたってこの視点を継承した。

実際、「軍団」が聖化されていく過程で、ローマカトリック教会傘下のハプスブルク勢力に対抗するプロテスタントのボヘミア勢力という宗教戦争時代の構図が呼び出され、1620年の白山の戦い以降、「ドイツ人」に不当に蹂躪され続けた「暗黒時代 (*Temné Období*)」からの解放の主体としての榮譽がズボロフの無名戦士たちに割り振られて

いくこととなる。そこでは、新しい国家の起源としての軍事的達成を「中世」から脈々と受け継がれてきた宗教的系譜にいかんにか位置付けるかが問われており、毎年7月2日に全国各地で催される各種式典を通じて、「ズボロフ」および「軍団」はフス派を起点とした宗教的伝統の中に位置付けられていった [Wingfield 2003: 671]。

こうして、帝国から国民国家へという転換のプロセスにおいて、ズボロフの戦いは単なる第一次世界大戦の戦勝という位置付けを超え、1620年の白山の戦いのリベンジとして第一共和国の重要な建国神話の一つとなり、名もなき死者たちの遺灰はナショナルな対立を宗派对立と重ね合わせることで、「中世」という聖なる起源を介して新生国家を権威付ける媒体となっていた。

2 「ズボロフ」から「ドゥクラ」へ

1939年、チェコスロヴァキアに侵攻したナチスによって、ズボロフの遺灰はヴルタヴァ川に破棄され、「軍団」および「ズボロフ」に関わる一切の記念碑が破壊された。そして1945年5月8日、ナチスの占領から解放されると、いわゆるポスト大戦期と呼ばれる時代が始まる。大戦終結から1948年2月のチェコスロヴァキア共産党 (*Komunistická strana Československa*) による政権奪取に至るまでの3年に満たない短い期間であるが、チェコ(スロヴァキア)の現代史において非常に重要な時代である。本節では、戦間期からポスト大戦期を経て社会主義期に至るまで、共産党内の「聖戦」としての位置付けが「ズボロフ」から「ドゥクラ」へと移行していくプロセスを追う。

戦間期、「ズボロフ」および「軍団」に対するチェコスロヴァキア共産党のスタンスは両義的であり、第一次世界大戦をあくまで「帝国主義戦争の一部」とみなす解釈と「ズボロフの戦死者は労働者階級であり、彼らは社会的平等を希求する国家の建設のために殉死した」とみなす解釈の間で揺れていた [672]。これは「軍団」の創設経緯に依っている。「軍団」を創設したのは、メンシェビキというロシア革命直後に主導権を握ったロシア社会民主労働党右派勢力であった。彼らは膠着しつつあった西部戦線の打開を図り、チェコ人とスロヴァキア人の捕虜からなる軍事組織を創設、西部戦線に投入した。その後、ボリシェビキ(ロシア社会民主労働党左派勢力)によるクーデターが起こり、政権がメンシェビキからボリシェビキに移行する。このとき、新政権がドイツ側と単独講和を結んだため、「軍団」は存在意義を失い、ソ連領内で孤立してしまう。「軍団」の創設主体がその後のソビエト連邦の国家運営を担ったボリシェビキではなく、彼らによって打倒されたメンシェビキであったということが、戦間期のチェコスロヴァキア共産党内での「ズボロフ」の位置付けを難しくしていた。

「ズボロフ」に対する態度を決めかねていた戦間期の共産党にとって転機となったのは、1927年のズボロフ10周年記念祭である。この記念祭を境に、チェコスロヴァ

キア共産党は「社会革命としての『ズボロフの約束』はブルジョワ政府の下では達成されない」として、共産主義イデオロギーの更なる普及を目的に「ズボロフ」を肯定的に捉えるスタンスへと大きく舵を切る。ナチス占領期を経てポスト大戦期を迎えると、国内での地盤固めを急いだ共産党は、1947年、ズボロフ30周年祭を主催するに至る。この記念祭以降、スラヴ対ドイツという構図が前景化し、「ドイツ勢力に対するスラヴ人の闘争」という位置付けが主流となっていく [675]。そこでは、チェコスロヴァキア民族を代表する党でありながら、いかにして共産主義イデオロギーを希求する党足り得るかが問われていた。

こうした中、「ズボロフ」を1945年5月のナチスに対するプラハ蜂起と同一視する解釈が提示され、ここにチェコスロヴァキア共産党はすでに「スラヴの兄弟」において導入されていた新興イデオロギーの受容を正当化しつつ、「中世」から連綿と連なる「民族史」の中に己を位置付ける回路を確立する。「ドイツ人」を共通の敵とする「スラヴ人」の中に自民族を位置付けることで共産主義イデオロギーの受容を正当化するレトリックは、ポスト大戦期にベネシュ布告を後ろ楯に大規模に展開されたズデーテンをはじめとする国境地域からのドイツ人の強制排除が推進される中、チェコ人とスロヴァキア人の連帯を軸とした戦後体制の再構築が模索されるプロセスで重要なモチーフとなった [Wingfield 2000: 248–252]。

ところが、1948年2月にチェコスロヴァキア共産党が政権を奪取した直後、一つの象徴的な出来事が起こる。ナチスによって破壊されたズボロフをはじめとする無名戦士の墓の再建計画がソ連の介入により頓挫したのである。この出来事を機に、「軍団」による戦いの位置付けが「ドイツ勢力に対するスラヴ人の闘争」から「赤軍に対する反革命闘争」へと反転し、ズボロフの戦いは公的言説から放逐されていった [Wingfield 2003: 678–679]。それは「ズボロフ」の記憶が「ドゥクラ」の記憶へと急速に置き換えられていくプロセスであった。1950年、軍の記念日がズボロフの戦勝記念である7月2日からドゥクラの戦勝記念日10月6日へと変更されることで、このプロセスは一応の完成をみる。

こうして、「ズボロフ」に代わって「ドゥクラ」が聖戦としての位置付けを獲得し、社会主義政権下、「民主国家による労働者階級の平和的連帯の重要なシンボル」として政権イデオロギーを支える重要な役割を果たしていくこととなる。その後、1968年の「プラハの春 (*Prážské jaro*)」を起点とした一時的な「雪解け期」、「ズボロフ」が陽の目を見ることもあったが、1970年代以降の「正常化体制 (*Normanizace*)」を通じて再び「ズボロフ」は抹消され、「ドゥクラ」が聖戦のポジションを独占する [680]。

1989年の体制転換並びに1993年のチェコおよびスロヴァキア連邦共和国 (*Česká a Slovenská Federativní Republika*) の解体以降、チェコにおけるポスト社会主義政権は「ズボロフ」および「ドゥクラ」をどう扱うべきか、態度を留保した。これは両者

のイデオロギー的重みを配慮した結果であり、新政権による新たな「歴史」が示されるのは2010年5月8日まで待たねばならない。

Ⅲ 「神のいない寺院」—体制転換以前のヴィートコフ—

ヴィートコフの丘 (*Vrch Vítkov*) は、チェコ共和国の首都プラハ旧市街地の東方に位置する何の変哲もない丘である。しかし、1989年の体制転換後、この丘がプラハのタウンマップに記載されていない期間があったというのは、それがボヘミア地方によく見られる何の変哲もない丘であったということ以外にチェコ史全般に関わる事情があった。

そもそもの発端は15世紀初頭、ヤン・フスによって主導され、ボヘミア地方全域に広がりを見せた宗教改革の機運を押さえ込むことを目的にローマ教皇によって派兵された皇帝ジグムント率いる十字軍を将軍ヤン・ジシュカが撃破したのがこの丘であったことに始まる。1420年7月14日のことである。二種聖餐を掲げたフス派はその後、ボヘミア地方における勢力を磐石のものとしていくが、1620年の白山の戦いを経て1648年のウェストファリア条約によってこの地域の再カトリック化が強硬に推し進められるようになると、フス派は急速にその数を減らしていく。いわゆる「暗黒時代」のはじまりである。

その後、歴史の闇に葬られていたフスやジシュカ、そしてヴィートコフの丘が再び歴史の表舞台に呼び戻されるのは、19世紀初頭の民族復興期のことである。ヨゼフ・ドブロフスキーという言語学者が、フスが説教の際、チェコ語を用いていた点に着目し、チェコにおける民族復興運動に先鞭をつけると、19世紀を通じてフスとジシュカは文と武、女性性と男性性といった相対する記号論的役割を担いながら民族のシンボルとしての地位を確立していく。そしてこの動きに伴って、旧市街広場 (*Staroměstské náměstí*) はフス、ヴィートコフの丘はジシュカとの関連が強く意識される場となっていた。

第一次世界大戦の結果、ハプスブルク帝国の解体が決定し、チェコスロヴァキア第一共和国が誕生すると、ズボロフの戦いをはじめとする第一次世界大戦末期の戦功を中世の軍事的伝統と結び付けようとする機運が高まり、これに伴ってジシュカとヴィートコフの政治的重要性が増していくこととなった。1927年、この丘に第一次世界大戦の戦勝記念館のオープンが構想され、1932年7月2日に開館、ナチス軍侵攻前夜の1938年10月にはパンテオンと霊廟がそれぞれ公開され、霊廟には建国の英雄トマーシュ・マサリクの遺灰が安置された。

本章ではまず、19世紀初頭の民族復興期からハプスブルク帝国の崩壊を経て第一共和政期、ナチス占領期、ポスト大戦期、社会主義政権期とイデオロギーがめまぐるし

く変転する中でプラハの公的領域がいかに編成されていったのかを概観する。その上で、ポスト大戦期、チェコスロヴァキア共産党が権力を掌握していく過程で、それまで旧市街広場やヴァーツラフ広場 (*Václavské náměstí*) など複数の場によって分担されていた公的領域としての役割がヴィートコフの丘へと集約されていくプロセスを追い、社会主義期を通じてヴィートコフの丘がどのような役割を担うことになったのかを確認する。

1 乱立する記念碑

東欧におけるナショナリズムの普及に関しては、フロツホの著作に詳しい。フロツホは比較政治史的観点から、東欧におけるナショナリズムの展開を三つの段階に分けて整理している。まず、A 段階は「自らの集団の言語的・文化的・社会的・歴史的属性を学問的に研究し、それについての自覚を普及する段階」、B 段階は「ネーションとしての意識を『覚醒』するためのアジテーションを行って、できるだけ多くの同胞を、ネーションの形成のために勝ち取る努力のなされる段階」、そして C 段階は「住民の大部分がナショナルなアイデンティティを重視し、大衆運動が形成される段階」である。そして、この最後の段階では、「社会全体が統合され、同時にナショナルな運動の中に保守的なものや自由主義的なものや民主的なものが分化してくる」[Hroch 1985]。

さらにフロツホは、これらの段階が地域によって具体的にどのように表れたのかという観点から、次の三つの類型を示している。第一のタイプは B 段階が封建期に始まり、19 世紀のはじめの数十年間の革命的な時期に高まり、同時にこの段階ですでに C 段階が並行的に進行していた地域 (チェコやハンガリー)、第二のタイプは封建期に B 段階は始まっていたが、C 段階は 19 世紀後半の立憲的な変革の後に始まった地域 (スロヴェニア、クロアチア、スロヴァキア)、そして第三のタイプは B 段階がすでに旧体制のもとで市民社会や立憲制度が樹立される前に現れていた地域 (セルビア、ギリシャ、ブルガリア) である [Hroch 1985]。

チェコにおける民族主義的機運は 1848 年革命を機に高まり、以降、フロツホの言う C 段階が本格的に展開していくこととなる。この段階で重要な役割を果たしたのが、公的領域への記念碑建造事業である¹。それまで公的領域はドイツ語話者・カトリック派 (親ハプスブルク勢力) に独占されていた。よって、ドイツ語話者との対抗関係を軸にネーションが確立されようとしていたこの時期、カトリック派に独占されていた公的領域を取り戻そうという機運がプロテスタント側で高まっていたことは故なきことではない。ドイツ語話者・カトリック派に不当に篡奪された公的領域の奪還はチェコ語話者・プロテスタント派の悲願であった。

¹ 民族復興期以降の記念碑建造事業の展開に関しては、ホイダおよびポコルニーの *Pomníky a Zapomínky* に詳しい [Hojda and Pokorný 1996]。

聖ヴァーツラフ像の再建も、こうした文化的運動の一環とみなすことができる。聖ヴァーツラフことヴァーツラフ一世はプシェミスル朝四代目の王であり、十世紀初頭、キリスト教化を推進することで、東方正教会とカトリック教会、そしてローカルな宗教が混在していたボヘミア地域の支配を固めたが、反対勢力に担がれた弟ボレスラフによって暗殺されたとされる。19世紀初頭の民族復興期以降、ヴァーツラフ一世は聖ヴァーツラフとして複雑な表象化を経験してきた。ハプスブルク帝国およびカトリック教会への抵抗を軸に民族主義的言説が編成されていく中、「チェコ人のスラヴ性を守り、ザクセンに対してボヘミアの独立を維持しようとする苦悩する愛国者」としてボレスラフらが称揚される一方、ヴァーツラフは聖ヤン・ネポムツキー、聖プロコフらとともに「偽の聖人」と貶められた [篠原 2004: 52]。ところが、1848年革命が起こり、ハプスブルク帝国の支配に対して「聖ヴァーツラフの王冠の諸領」の自治を要求するにあたって、その政治的・歴史的論拠が強く求められるようになると、「ウィーンの皇帝権力に対するボヘミアの『歴史的権利』」が『チェコ国民の権利』に読み替えられ、ヴァーツラフはこの「歴史的権利」を体現する者として再び肯定的な価値を帯びて歴史の表舞台に戻ってくる [52]。聖ヴァーツラフ像の再建はこうした文化的要請に応えたものであり、以降、この像が再建されたヴァーツラフ広場はドイツ性とスラヴ性が葛藤する場としてチェコ（スロヴァキア）現代史を通じて重要な政治的・文化的役割を果たしていくこととなる²。

1890年5月には、第一回ヤン・フス像建造委員会 (*Spolek pro zbudování pomníku Mistra Jana Husa*) が開催された。最重要課題はフスの像を市街地のどの場所に建造するかであり、最終的にはヴァーツラフ広場やベトレーム広場といった他の候補地を押し退けて旧市街広場が選定された。ところが、この旧市街広場はもともと MARIA 柱像が屹立するカトリックのランドマークであったため、カトリック側は「栄光の旧市街広場にフス像を建立することを断じて許すことはできない。この像はカトリック教会に対する侮辱、異端、反抗のシンボルに他ならない」として、1897年から翌年にかけて大規模な対抗デモンストレーションを展開した。1898年6月には4000人を越える人々を動員するも、1899年1月16日、プラハ市議会において44票対38票という僅差で旧市街広場へのフス像の建造が承認された [Paces 2009: 26]。こうして旧市街

² 1918年、チェコスロヴァキア第一共和国の独立宣言が読み上げられ、マサリクと「軍団」が行進したのもこの広場であったし、1969年のワルシャワ条約機構軍による侵攻に反対したヤン・パラフが焼身自殺をしたのも、1989年のビロード革命の際、人々が結集したのも、さらには、著名な文学者にして政治家であり、体制転換を跨いで、半世紀近くにわたってチェコ（スロヴァキア）の「民主化」を主導してきたヴァーツラフ・ハヴェルの死に際して人々が参集したのもこの広場であった。各々の出来事において広場が果たしている役割は異なるが、ドイツ性とスラヴ性の葛藤を具現化する聖ヴァーツラフを中心に張り巡らされた象徴秩序が、その時々の人々の政治的実践に力を与えていることは間違いない。

広場はマリア柱像とフス像が並び立つ場、カトリックとプロテスタント、ドイツ話者とチェコ話者という二つの力が拮抗する場となっていた。

フス像の建造事業と並行して進行していたのが、ヴィートコフの丘へのヤン・ジシュカ像の建造である。構想は 1883 年、ジシュカ記念碑建造委員会 (*Spolek pro zbudování pomníku Jana Žižky z Trocnova*) が起ち上げられたときに遡る。この頃までにジシュカはフスと同様、民族の英雄としての地位を確立しており、とりわけ労働者階級に絶大な人気を誇っていた。チェコ史を振り返っても、ヴィートコフの戦いが数少ない軍事的勝利であったことから、フスやヴァーツラフなどと違い、完璧無比な輝かしい男性的英雄として急進的なナショナリストからも重宝されていた [69]。

1913 年、待望のデザインコンテストが開催されたが、フランティšek・ビーレク の作品がジシュカの軍事的貢献を軽視しているという理由で却下されたり、サンテティスムを採用したヤン・シュトゥルサとヤン・コチェラのデザインがドイツ風とみなされたりと審査は難航を極めた。最終的には、アールヌーヴォー的作風を得意とするボフミル・カフカのデザインが採用され、像の建造が開始された。ところが 1939 年、チェコスロヴァキアに侵攻してきたナチスドイツによって、像の建造はまさにブロンズを流し込もうという最後の行程で中断されてしまう。大戦中、ヴィートコフはナチスドイツ軍の武器弾薬庫として使用されることとなるが、このことが大戦後の共産党政権によるヴィートコフ活用の一つの布石となる [172]。

2 ゴットワルトの遺体

ポスト大戦期を経て、1948 年 2 月に共産党政権が誕生して以降、それまでプラハ市街地に散在していた民族の記念碑的場としての役割はヴィートコフの丘に集約されていき、1950 年 7 月 14 日のヤン・ジシュカの騎馬像の完成を以て、プロジェクト自体も一応の完成をみる。共産党はこの地を己のプロパガンダの発信基地とみなし、「中世」より連綿と連なる民族的系譜の正当な継承者として己の権力の正当性を確立することを狙い、1950 年代を通じて各種の国家式典をこの地で開催していくこととなる。

注意すべきは、チェコスロヴァキア共産党が他の東欧圏の共産党同様、到達すべき目標としての共産主義社会を既存の国家制度の枠内で構想していたという点であろう。必然的に、政権の正当性を確立するレトリックは、ナショナリズムの語法を用いることとなる。こうしたわけでヴィートコフの丘は、共産主義社会への希望とナショナリストティックな情熱とが競演する場となっていた。特に、1948 年 2 月の総選挙における圧倒的勝利を背景に共産党による政権奪取が達成されたチェコスロヴァキアにおいて、共産主義社会への希望は一概にお仕着せのものとは言い切れない側面があった。二度の世界大戦で疲弊した精神は、より純粋で完璧な国民国家への渴望と来るべき共産主義社会への希望に導かれ、愛国的政党としての共産党に己の未来を託したのであ

る。

党のプロパガンダの発信基地としてのヴィートコフの役割を示す事例として最も象徴的なのは、記念館内部の霊廟へのクレメント・ゴットワルトの遺体の安置であろう。ポスト大戦期に第二共和国首相、1948年2月の政権奪取後は大統領を務め、共産党一党独裁体制の確立に力を注いだゴットワルトは1953年3月、モスクワでのスターリンの葬式から帰国した直後、肺炎をこじらせ死去してしまう。党は彼の死を、スラーンスキー事件の火消しに利用できないかと考えた。スラーンスキー事件とは1951年11月、党第二の実力者ルドルフ・スラーンスキーをはじめとする十四人がチトー主義者として捕らえられ、同年12月3日に処刑された一連の出来事である。本事件は完璧無比なスターリニストであったゴットワルトによる大量粛清の一つであったが、この事件が党に対する国民からの信頼に与えた影響は小さくなかった。チェコスロヴァキア共産党はクレムリンに展示されたスターリンの遺体に倣って、ゴットワルトの遺体に防腐処理を施した上でヴィートコフの記念館内部の霊廟に安置することを決定した [189]。

この霊廟はもともと、第一次世界大戦から戦間期にかけての困難な政局の舵取りを主導した第一共和国大統領トマーシュ・マサリクの遺灰を安置する霊廟として記念館内部に設置されたものであったが、そこには、「ネーションの解放闘争の頂点は1918年ではなく、1948年である」として、戦間期に定着、普及していた既存のレトリックを上書きしようという狙いがあった [Witkovsky 2001]。

防腐処理を施され、霊廟に安置されたゴットワルトに軍服が着せられたことにも、党による政治的意向が反映されていた。ヴィートコフという場で遺体に軍服を纏わせることによって、党はゴットワルトを対独パルチザン闘争の英雄として将軍ヤン・ジシュカの正当なる後継者に位置付け、スラーンスキー事件によって定着してしまった冷徹なスターリニストというイメージの払拭を目指したのである [Paces 2009: 189]。そこでは、ゴットワルトとジシュカの連結を介して「ドイツ人との闘争」を軸とした「民族史」に己を挿入することで、共産主義イデオロギーをいかに「我々のイデオロギー」として提示できるかが賭けられていた。

ところが、完璧な防腐処理を施されたはずのゴットワルトは短命であった。1956年のフルシチョフによるいわゆるスターリン批判を機に大規模な反体制運動が噴出したポーランドやハンガリーと異なり、プラハでは表立った動きは見られなかったが、ヴィートコフ記念館の内部では防腐処理を施したはずのゴットワルトの遺体の腐敗が進行していた。すぐさま100人に上る科学者や医療従事者が動員され、遺体の修復が試みられたが、二度目のスターリン批判によって党がそれまでのスターリン主義的強行路線を断念せざるを得なくなった1962年、ゴットワルトの遺体は火葬され、その遺灰は霊廟内に安置された。

以降、記念館はチェコスロヴァキア国内の小学生の遠足やソ連からの公式使節団の見学ルートの一つでありつつも、徐々に人々の日常生活からは切り離された空虚な空間へと変容していく [Paces 2009: 186; Witkovsky 2001]。1968年の「プラハの春」後の反動期として知られる「正常化時代」を通じて、ヴィートコフでは多くの国家式典が催され、「神のいない寺院」³としての役割は維持し続けていたが、1989年の体制転換を機に社会主義期の記憶と分かちがたく結びついたアンタッチャブルな地としてプラハの公的領域からしばし抹消されることとなる。

IV 「時代」を象る二つの遺灰

以上、チェコ近現代史を通じて、二つの遺灰、ヤン・ジシュカの騎馬像、そしてヴィートコフという場がいかなる政治的・文化的役割を担ってきたのかを確認してきた。IIではまず、第一次世界大戦における対ハプスブルク戦勝である「ズボロフ」がハプスブルク帝国から多民族状況を引き継いだ困難な国家運営の中で、ナショナルな対立を宗派対立によって補強することで第一共和国の成立を支える媒体となっていたこと、次に、第二次世界大戦における対ナチス戦勝である「ドゥクラ」が1948年2月に政権を奪取した共産党によって、「民主国家による労働者階級の平和的連帯の重要なシンボル」として、「ズボロフ」に代わる聖なる事物としてのポジションを獲得していったことを確認した。続くIIIでは、1948年2月の共産党による政権奪取以降、ヴァーツラフ広場や旧市街広場など複数の場によって分担されていた公的領域としての役割がヴィートコフの丘に集約されていく過程を追い、この地が社会主義政権期、防腐処理を施された指導者ゴットワルトの遺体が安置されるなど、国家およびイデオロギーの聖性を表現する特殊な装置としての役割を担ってきたことを確認した。

以下、1989年の体制転換後のヴィートコフの変遷を追う中で、2010年5月8日の第65回第二次世界大戦戦勝記念日に二つの遺灰がヤン・ジシュカ像の下に並置されるまでの経緯を確認し、二つの遺灰の並置にどのような政治的意図が働いており、その意図が当地のいかなる社会的状況に動機付けられているのかという観点から、体制転換以降、「歴史をめぐる内戦」が具体的にどのように展開しているのか、その一端を素描してみたい。

1 空白の十年間

1989年の体制転換以降、ヴィートコフはプラハのタウンマップから消去され、プラ

³ ヴィートコフの丘を「神のいない寺院」と捉える視点は、イデオロギー発信装置としてのヴィートコフの役割を詳細な歴史的データから明らかにした *Chrám bez Boha nad Prahou* に依る [Galandauer 2014]。

ハの公的領域からその存在を抹消されてしまう⁴。1870年代、1848年革命の余波を受け、欧州各地で民族主義的気運が高揚する中、15世紀の宗教戦争の戦勝地であるこの地にネーションの記憶を保存する複合記念施設の建設が計画されて以降、民族の象徴的場として衆目を集めてきたが、共産主義イデオロギーの発信装置としてヴィートコフをもっとも効果的に活用した社会主義政権が崩壊した後、ポスト社会主義政権はしばらくの間、この地に対して明確なスタンスを定めることができなかった。こうして体制転換後、ヴィートコフは人々の生活世界から切り離されただけでなく、公的領域にも居場所を持たない場となる。ジシュカ像やドゥクラ峠の遺灰をはじめ、社会主義期、そのプロパガンダの発信を担わされた様々な事物には全く手が付けられず、そっくりそのまま取り残された状態で、この地の存在自体が全体として抹消されてしまったのである。

しかし、この状態はそれほど長くは続かなかった。1994年には、ヴィートコフのリース計画が持ち上がっている。当時、この地を管轄していた文化省が、ヴラチスラフ・ツェカンという新興資本家ヘリースを持ちかけたのである。ツェカンは当初、この丘にディズニーランドを模した巨大なテーマパークおよび宿泊施設を建設しようと計画したが、結局、テーマパークの建設は実現せず、ツェカンの友人に貸与され、ガラ・パーティー用の建物として利用されるに留まった [Witkovsky 2001]。

1999年以降、文化省が主導する形で新たなアプローチが試みられるようになる。1999年11月の退役軍人の日には、共産主義のシンボルマークであるハンマーと鎌が隠された状態で、ほぼ十年ぶりにヴィートコフの記念館でイベントが開催された。そして2002年、ヴィートコフは国民博物館の管轄下に置かれる運びとなり、ヨゼフ・ドラバツによる記念館の全面修復が開始される [Witkovsky 2001]。

こうして1989年の体制転換後、一旦は国家からも国民からも見放されたかに見えたヴィートコフであったが、1999年の退役軍人の式典を皮切りに、2002年、国民博物館の管轄下に組み込まれると、ヴィートコフを公的領域に再編入する道筋が確立され、2010年5月8日の第二次世界大戦の戦勝記念日、「ズボロフ」と「ドゥクラ」を冠した二つの遺灰が並置されることとなる。

体制転換を基点とするチェコの軍隊の改変に焦点を当て、ポスト植民地状況と対比しつつ体制転換後のチェコ軍に生じた様々な現象をバタイユのグロテスク概念を用い

⁴ ヴィートコフの存続が危ぶまれたのはこれが初めてのことでない。ナチス占領期においても抹消の危機に瀕していた。1939年、プラハに侵攻したドイツ国防軍はすぐさまヴィートコフを占拠し、1940年には記念館内外に設置されたチェコスロヴァキアの独立を象徴する全ての記念碑の破壊命令を発令した。これを受けてチェコスロヴァキア軍団退役軍人や民族主義者らは持ち運び可能な品々は安全な場所に避難させ、モザイクや大理石のレリーフなどは打ち砕いて記念館の壁の内部に埋めこむことによって、場の存続を試みた [Witkovsky 2001]。

て描き出したハナ・チェルヴィンコヴァーは、「ポスト社会主義国家では、社会主義下の社会および政治を制御していた旧来の基準から切り離され、同時に新たな標準が制度化されるリミナルな段階が生じる」として、「ポスト社会主義期」をファン・ヘネップやターナーのリミナリティ概念を用いて捉える視点を提起する [Červinková 2006: 3]。1989年から十年に渡るヴィートコフの凍結、その後の一連の秩序への再編入過程を、体制転換に端を発するリミナルな状況からの復帰の過程と捉えるならば、2010年5月8日の式典は通過儀礼における統合儀礼と位置付けることができる。このとき、切り離されようとしていた「旧来の基準」とはいかなる基準であり、制度化されようとしていた「新たな標準」とはいかなる基準であったのであろうか。

2 二つの遺灰の出会い

2010年5月8日、ジシュカ像が聳え立つヴィートコフ記念館の前庭には、当時の共和国大統領ヴァーツラフ・クラウスをはじめ、同じく上院議長プシェミスル・ソボトカ、下院副議長ミロスラヴァ・ニェムツォヴァー、首相ヤン・フィシエル、プラハ市長パヴェル・ベームら、国防畑からは防衛相マルティン・バルターク、共和国軍参謀司令本部長ヴラスチミル・ピツェクらが参集した。また、現在はチェコやロシア、イギリスやイスラエルなどに居住する第二次世界大戦の退役軍人も参列し、その数は250人に上った。

式典は午前九時に始まった。大統領が防衛相を従えて「名誉の中庭」に入場すると、チェコ共和国国歌が奏され、チェコ共和国軍広報司令官による報告がこれに続く。精鋭部隊の軍旗の受け渡しの後、防衛相バルタークの宣誓が始まった。「今日、マサリクのチェコスロヴァキア時代の理想が満ちている。最も崇高な民主主義を求める我々は民族および国家の独立を目指す戦いの遺産を保存するために、ここに無名戦士の遺灰を安置する」。

その後、バルタークは出自の異なる二つの遺灰がヴィートコフで出会うことになった顛末を簡単に確認した後、次のように締めくくっている。「大統領、私は本日の式典が我々の社会生活における絶対的に素晴らしい瞬間を体現しているということを強調させていただきたい。その最大の目的は、第一次大戦中の民族と国家の独立を求めた闘争および第二次大戦中の民族的自立の回復を求める闘争とのイデオロギー的連続性を倫理的に取り戻すことである。我々の共同体およびチェコ共和国軍の民主主義の伝統は、共産主義的全体主義に対する抵抗をことあるごとに確認し、その犠牲者たちの記念碑に寄り添う中で豊かに強化されていくはずである」。

この「共産主義的全体主義に対する抵抗 (*odpor proti komunistické totalitě*)」という用語は、一体何に向けられているのであろうか。この宣誓の目的は、第二次世界大戦戦勝六十五周年を記念した式典において、二つの大戦で犠牲となった遺灰が並置

されることがどのような意義を持つのか、政府の公式見解を示すことにある。改めて確認するまでもなく、第一次世界大戦の敵はハプスブルク帝国、第二次世界大戦の敵はナチスドイツであり、ズボロフでは兵士たちはハプスブルクからの独立を目指して闘い、ドゥクラ峠ではナチスドイツからの解放を目指して闘った。もし「共産主義的全体主義に対する抵抗」という言葉が二つの大戦の戦死者に向けられているのだとすると、そこには明らかな誤認が含まれていると言わざるを得ない。

二つの遺灰を前にしたバルタークが、これらとは一見無縁なはずの「共産主義的全体主義に対する抵抗」という用語を持ち出さなければならなかった事情とは何であろうか。淡々とした歴史的事実の確認の文脈に「共産主義的全体主義に対する抵抗」という用語を滑り込ませた背後に、一体どのような力が潜んでいるのであろうか。

3 「東」の亡霊

「ポスト社会主義の優等生」と目されるチェコ共和国において、1989年を起点とした断絶は一つの大きなテーマであった。ネオリベラリズムの旗印の下、血塗られた「過去」といかに決別し、「西」に同化していくかがこの国の体制転換後の政治的実践を牽引する一つの大きな力であったことは間違いない。ウィーナーは「ポスト社会主義」を生きるチェコの人々が資本主義によって輝かしい未来がもたらされるという自由市場に関する夢をいかにして肯定し続けているのかという観点から、体制転換後のチェコにおいて、「西」という地政学的名称が回帰すべき理想郷として希求される様を描き出している。「チェコの人々にとって、市場は超越的希望と結び付けられた『神話的形象』となった。この自由市場という名の新たなメシアは、彼らに『聖なる救済』という言葉を想起させた。人々にとって市場化は、社会主義国家によって粉砕された前社会主義時代の市民性および合理性への回帰をも意味していた」[Weiner 2007: 58]。さらにウィーナーは次のように続ける。「この市民性及び合理性への回帰は、それによって彼らが『歴史に帰る』、『ヨーロッパへ帰る』ことができるような、空間的、時間的復古を含んでいた。市場化は時間および空間における復古を意味していたのである」[62]。「ヨーロッパへの回帰」というメタナラティブの下で、人々がネオリベラリズムによってもたらされるであろう恩恵を求めて前向きに歩み続けるという視点は、たしかに当地のリアリティの一端を確実に捉えている。

しかし、「ヨーロッパへの回帰」を希求する運動は、「ポスト社会主義」と括られる時代により捉えどころのない現象を生起させる。ウィーナーは序章において、2004年に封切られたドキュメンタリー映画に言及する。『チェコの夢』と題されたこのドキュメンタリーは、プラハ郊外にハイパーマーケットがオープンするというデマに翻弄される人々の様子を風刺的に捉えたものである。彼女はこのドキュメンタリーを、人々の「西」に対する心象風景を具現化するものとして提示するが、このドキュメンタリ

一の製作者たちの視点がどのように構成されているのかという点に関しては素通りしてしまう [Weiner 2007]。『チェコの夢』を構成する視点は、葬り去ったはずの「東」の亡霊の存在を暗示する。

旧東ドイツでは、社会主義体制の再評価を志向するオスタルギーと呼ばれる現象がしばしば観察され、それが一つの政治的潮流を作り出しているという [木戸 2006]⁵。体制転換後のチェコ共和国においても、共産主義は決別したり懐かしんだりする対象以上の存在感を示している。実際、2002 年の下院選挙では、社会主義を経験した中東欧諸国の中で唯一、党名に共産主義を残すボヘミア・モラヴィア共産党 (*Komunistická strana Čech a Moravy*) が 18.5% の得票率を獲得しており、2006 年の同選挙においても 12.8%、直近の 2013 年選挙では 14.9% の得票率を獲得している。その他左派勢力の存在感も無視できず、2010 年の総選挙の結果、中道右派連合による連立政権が発足するも得票率では中道左派チェコ社会民主党が第一党の地位を獲得しており、中道右派チェコ市民民主党の創設者ヴァーツラフ・クラウスの満期退任に伴い行われた 2013 年の大統領選挙の結果、社民党出身のミロシュ・ゼマンが大統領に就任している。

こうした左派勢力の動向はどのように捉えられるであろうか。それは単に体制転換後、強力に推し進められた一連のネオリベリズム政策に対する批判的勢力の受け皿としての役割を果たしているだけなのであるか。それともそれは、より積極的に、現状の資本主義社会を転覆し、社会主義社会を再び生きる夢を託されているのであろうか。

体制転換以降の旧社会主義圏の共産党後継政党に関する従来の比較研究では、綱領が黨員や従来からの支持層にアピールする内容にとどまっていること、支持者が高齢者や年金生活者などに偏っていること、下院において重要なポストを与えられず、委員会などからも排除されていることから党の改革に失敗した事例として扱われてきた [eg. Fiala, Holzel, Mareš and Pšeja (eds.) 1999]。

これに対して坪井は 2002 年の下院選挙以降、下院議員ヴァーツラフ・フィリップの下院副議長への就任を皮切りに、共産党にも議会内での重要なポストが割り当てられるようになり、社民党との連立を模索する動きが出てくるなど国政における存在感を強めつつある点を指摘している。単独での過半数確保が困難な状況に陥った社民党内部では 2002 年以降、「共産党との協力への関心が高まってきて」おり、ザオラーレク (2002 年から 2006 年下院議長) やイチーンスキー (下院議員、旧共産黨員)、ゼマン (現大統領) らがそれぞれ共産党との連携の必要性について言及しているという [坪井

⁵ 木戸は六百万人の観客を動員した映画『グッバイレーニン』を機にドイツ中を席卷したこの現象を、「大がかりな資産および価値の没収であり、一部は自己放棄でもあった「統一」過程を根本的に省察し、民衆レベルの個人史、等身大の経歴にこだわった、しかも皮肉とユーモアを込めた、大文字の歴史教理への対抗戦術と解すべき」と総括している [木戸 2006]。

2009]。

たしかに、ネオリベリズムに対する批判的勢力の受け皿の一つとしての側面も否定できないが、問われねばならないのは、そうした受け皿の一つとしての役割を他ならぬ共産党が引き受け続けているという事実である⁶。支持層の大半が社会主義を実際に経験した61歳以上の高齢者によって占められているという点、その大多数が体制転換に際してほとんど変更を加えられなかった党綱領を支持しているという点〔坪井 2009〕を考慮しても、社会主義期を生き抜き、四十歳以上で体制転換を迎えた人々が依然として共産主義を掲げる政党を支持し続けているという事実は見逃せない。この事実は、社会主義期に党が掲げた物語がポスト社会主義期においても社会の中の一定層に承認され、影響力を持ち続けているという事実の証左と言えよう。

4 「歴史」をめぐる闘争

1989年の体制転換から二十余年を経た第二次世界大戦の戦勝記念演説に「共産主義的全体主義に対する抵抗」という用語を滑り込ませたもの、それはいくら葬っても葬り去れない「歴史」、いわば、亡霊としての「歴史」⁷である。1989年以降、凍結状態にあったヴィートコフに新たな動きが見られたのが1999年、2002年の国民博物館への編入を経て、ヴィートコフの公的領域への組み込みが確立されていく「統合」のプロセスに一つの区切りをつけたのが二つの遺灰の並置であり、体制転換を生き延びた「ドゥクラ」の隣に「ズボロフ」が並置されたとき、これら二つの遺灰の出会いには「共産主義的全体主義に対する抵抗」という名称が与えられた。この名付けは第二次世界大戦をいかに位置付けるかという「歴史」をめぐる闘争の一環であり、このとき二つの遺灰は闘争がそこにおいて焦点化され、これを組織化する役割を果たしている。それでは、「歴史」をめぐる闘争は、二つの遺灰において実際、どのように焦点化され、組織化されているのであろうか。決別したはずの「東」、葬り去ったはずの「歴史」は、

⁶ 2000年代には共産党と並んで、「緑の党」(*Strana Zelených*)がネオリベリズム路線に対する批判的勢力の受け皿としてそれなりの存在感を示したが〔坪井 2006〕、2010年の下院選挙で議席を失った。

⁷ この用語は、太田が『亡霊としての歴史』の中で示した視点に着想を得ている。太田はシュローダーによるデリダ解釈に依拠しながら、亡霊を意味の固定を拒絶するように現在へと回帰してくる存在、いつ出てくるか、どのような姿で現れるか、事前には予測できない存在、時間さえも調節不全にし、その反時代性を主張する存在として提示する〔太田 2008: 12〕。さらに太田は映画「ピラヴド」を題材に、そこで描かれている世界が「可視化することは無理でも、その存在を日々体験せざるを得ない亡霊の住む世界であり、『過ぎ去った』といわれているものに憑かれた世界」であると指摘し、「歴史の出来事は過去として振り返るものではなく、つねに現在へと姿を変えて回帰する可能性を秘めており、だからこそ出来事の意味は何度もこじ開けられる」と主張する〔12-14〕。「時間の流れに逆らうように、過去の出来事がわたしたちの社会に憑くさま—いわば、時間の『脱節』—に着目」する太田の試みは、葬り去ったはずの「歴史」が現実を不断に刷新し続ける事態を捉える視点を提供してくれる。

そこにおいてどのような役割を果たしているのだろうか。

篠原が指摘するように、チェコにおける「歴史」をめぐる闘争は、第二次世界大戦をどのように評価するかという点を中心に展開してきた[篠原 2006]。2010年5月8日、二つの遺灰の霊廟内への安置の後に記念館内で行われたヴァーツラフ・クラウスの演説もその大部分が第二次世界大戦をいかに解釈するか、すなわち、この戦争にどのようなアクターがどのように関わっており、それら一連の効果としていかにチェコスロヴァキアという国家が成立し、復活することとなったのかという点に割かれている。「非常に逆説的なことではあるが、我々の国家の独立と主権は二つの世界大戦に依っている。これらがなければ、我々の国家の独立も主権も達成されなかったであろう。我々はこの点を忘れてはならない」。ここに表現されている「歴史」は、第二次世界大戦を「反動的過去」から「革命的未来」への転換点として民族解放闘争の頂点に位置付ける共産党の公式史観に対する挑戦であり、そこからは「ズボロフ」と「ドゥクラ」を並置した政治的意図が読み取れる。

Ⅱで確認したように、「ズボロフ」はナショナルな構図を宗教的構図によって補強することで第一共和国の成立を正当化する媒体として働いていた。注目すべきは、多民族を内包した状況下で国民国家という枠組みを正当化するにあたって、「ズボロフ」という媒体を基点に「中世」と「第一共和国」が結び付けられていたという点である。ここでは、「ズボロフ」を介して結ばれた「中世」と「第一共和国」の結びつきによって宗派对立の民族対立による上書きが正当化されていた。これに対して、共産党政権は「ズボロフ」の反ボリシェビキ的起源を嫌い、「ドゥクラ」に聖なる事物としての役割を担わせることで、第二次世界大戦を民族解放闘争の頂点に位置付ける新しい「歴史」を提示した。重要なのは、共産党政権によって示されたこの新しい「歴史」が、第一共和国が示した「歴史」を別の文脈に移植することによって成り立っていたという点である。共産党政権はジシュカやゴットワルトを活用しつつ、宗派对立が民族対立によって上書きされた「歴史」を共産主義的文脈へと移植していった。1948年2月の共産党による政権奪取後に展開した「ズボロフ」から「ドゥクラ」へという過程は、「プロテスタント＝チェコ」対「カトリック＝ドイツ」という対立軸をスラヴ対ドイツという対立軸へと包摂していくプロセスと捉えることができる。民族解放闘争の頂点としての第二次世界大戦は、第一共和国による「民族史」の共産主義的文脈への移植を支え、チェコ（スロヴァキア）民族を共産主義イデオロギーの担い手へと変換させるゼロ記号として働いていた。そして、このゼロ記号としての第二次世界大戦を基点とした変換、第一共和国による「民族史」の共産主義的文脈への移植こそ、1948年2月の政権奪取以降、チェコスロヴァキア共産党が愛国政党として紡ぎ出した「歴史」であった。

「今日、マサリクのチェコスロヴァキア時代の理想が満ちている。最も崇高な民主

主義を求める我々は民族および国家の独立を目指す戦いの遺産を保存するために、ここに無名戦士の遺灰を安置する。「マサリクのチェコスロヴァキア」とのつながりの中に新しい「時代」を位置付け、ナチスによる占領期と社会主義期という二つの「時代」によって途絶えたかに見える「民主主義」の伝統がいま再び蘇りつつあることを高らかに宣言するバルタークの宣誓は、古い「歴史」の解体が実演された後、「最も崇高な民主主義を求める我々」が「統合」されるべき先を明確に指し示す。2010年5月8日の国家式典における二つの遺灰の並置は、「中世」と「マサリクのチェコスロヴァキア」によって構成される「民族史」を共産主義的文脈から救い出し、そこに新たな「時代」を位置付けようとする政治的試みであった。「共産主義的全体主義に対する抵抗」という用語によって導入された「ナチス＝社会主義（共産党）」というレトリックを通じて、ナチスによる占領期と社会主義期を「中世」から連綿と連なる文脈から等しく排除することによって、「フス派」と「マサリクのチェコスロヴァキア」によって構成される文脈への回帰は達成される。「ドゥクラ（第二次世界大戦）」によって支えられていた「歴史」をいかに解体するかということがポスト社会主義政権の課題だったわけであり、「ドゥクラ」の隣に並置された「ズボロフ」はまさにこの解体のプロセスを開始し、促進させる役割を果たしていた。ゼロ記号としての「ドゥクラ（第二次世界大戦）」は「ズボロフ」と並置されることによって民族解放闘争の頂点としての意味合いを失い、国家の起源としての役割を第一次世界大戦と二分することとなる。ここに、「フス派」と「マサリク」をつなぐ「民族史」は共産主義的イデオロギーから救い出され、半世紀以上に渡って人々の実践を呪縛し続けてきた「歴史」の解体・再構築が実演された。

この「歴史」の脱構築のプロセスを明確かつ効果的に実演するには、体制転換に際して社会主義期の表現装置が解体されることなく、そのまま凍結されていたヴィートコフという場が最適であった。ヴィートコフのヤン・ジシュカ像の下への二つの遺灰の並置は、共産党による公式史観を再生産し続けた装置（関係性）に「ズボロフ」を投げ入れることによって、これを一息に転覆させようという試みであった。二つの遺灰が旧市街広場でもヴァーツラフ広場でもなく、ヴィートコフの丘に並置された理由はここにある。共産主義によって篡奪された「歴史」を「マサリクのチェコスロヴァキア」との繋がりの中に取り戻すこと、これこそ体制転換後、凍結されていた「神のいない寺院」への「ズボロフ」の投入による「歴史」の解体・再構築作業の狙いであったと言えよう。

このように、ヴィートコフの丘に屹立するヤン・ジシュカ像の下への二つの遺灰の並置は、前政権による「歴史」が依然として影響力を持ち続けているという政情を背景に、ゼロ記号としての「ドゥクラ（第二次世界大戦）」を共産主義的文脈から引き剥がすと同時に、ナチスによる占領期と社会主義期を等しく「民族史」から追放するこ

とによって、「中世」と「第一共和国」によって構成される「歴史」への回帰を実演しようという試みであった。ここに、ナチスと社会主義という二つの「時代」によって失われた「マサリクのチェコスロヴァキア」との繋がりが取り戻され、1989年の体制転換を起点としたリミニナリティからの回復が標し付けられることとなった。

V おわりに

2015年2月25日夕刻より、プラハ旧市街広場において一つの政治イベントが開催された。「未来への光—反共産主義的暗黒 (*Světlo pro Budoucnost — Ne Komunistickému Temnu*)」と題されたこのイベントには、2010年5月8日の式典にも参加していた元下院副議長ミロスラヴァ・ニェムツォヴァー（現下院議長）の姿もあった。1948年2月の共産党による政権奪取を「記念」するイベントであり、ポスト大戦期、チェコスロヴァキアの共産主義化を阻止することができなかった「民主主義勢力の失敗」と向かい合うことで、「民主主義」を守り抜く決意を確認するためのものであった。広場の北東部、中世の宗教改革の英雄ヤン・フス像の横には牢獄を模した赤い鉄格子が置かれ、「共産主義は人間性を貶める」といったプラカードや、より具体的に、「共産党の得票率を5%以下に」といった「数値目標」も掲げられた。夜の帳が下りると、人々は火を灯した蝋燭を手に人間の鎖を作った。

中でも目を引かれるのが、絞首刑台を模した木の枠組みの両隅に掲示されたプラカードである。片方には「KSČM (共産党) 大量殺人の支持政党」というフレーズが赤い文字で印字され、もう片方にはナチスのシンボルマークである鍵十字と共産主義のシンボルマークである鎌とハンマーが等号で結ばれている。反ハプスブルク闘争の戦士と反ナチス闘争の戦士の出会いを「共産主義的全体主義に対する抵抗」と名付けさせた精神が、ここでも人々を連帯させている。

ナチスと共産主義が等号で結ばれたプラカードがわざわざ掲示されなければならないということは、当然のことながら、この等置が当該社会の成員すべてに共有されていない可能性を示唆している。2006年、チェコ共和国内務省治安当局はボヘミア・モラヴィア共産党の下部組織である共産主義青年同盟 (KMS) の活動を非合法的活動と認定した。「KMS は生産手段の私的所有を否定し、共同所有へと再転換すると主張する。こうしたマルクス主義の根本原則に固執する限り、活動禁止措置は続ける」と牽制する当局に対して、ダリム・コンダ KMS 副議長は「当局が国家権力という暴力装置を使用してわれわれの組織を公式に解散へと追い込むのなら、われわれの社会主義擁護の闘いはさらに先鋭化する」と徹底抗戦の構えを見せている。

2010年5月8日、「歴史をめぐる内戦」は、相反する二つの「時代」を背負った遺灰を中心に焦点化され、表面化した。2015年2月に人々を連帯させた人間の鎖は、この「内戦」が今後も様々な「時代」、様々な文脈、様々な対立軸を切り離したり、縊り

合わせたりしながら、「ポスト社会主義」と括られる時間・空間を不断に刷新し続けていくであろうことを予告している。

参考文献

Červinková, Hana.

2006 *Playing Soldiers in Bohemia: An Ethnography of NATO Membership*. Prague: Set Out.

Fiala, Petr, Jan Holzel, Miroslav Mareš, and Pavel Pšeja. (eds.)

1999 *Komunismus v České republice*. Brno: MPU.

Galandauer, Jan.

2014 *Chrám bez Boha nad Prahou: Památník na Vítkově*. Prague: Havran.

Hojda, Zdeněk and Jiří Pokorný.

1996 *Pomníky a Zapomínky*. Prague: Paseka.

Hroch, Miroslav.

1985 *Social Preconditions of National Revival in Europe*. Cambridge: Cambridge University Press.

木戸 衛一

2006 「ノスタルジーか自己エンパワーメントか：東ドイツにおける「オスタルギー」現象」『東欧の20世紀』、高橋秀寿、西成彦（編）、pp.239–268、人文書院。

太田 好信

2008 『亡霊としての歴史』人文書院。

Paces, Cynthia.

2009 *Prague Panoramas: National Memory and Sacred Space in the Twentieth Century*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.

篠原 琢

2004 「聖公ヴァーツラフをめぐる記憶と政治」『歴史と地理』571：49–53。

2006 「中央ヨーロッパの歴史とは何か：異論派サークルにおける現代史論争」、『東欧の20世紀』高橋秀寿、西成彦（編）、pp.295–324、人文書院。

坪井 宏平

2006 「チェコ共和国における『緑の党』の諸相」『ロシア・東欧研究：ロシア東欧学会年報』35：84–94。

2009 「現代チェコの政党政治におけるボヘミア・モラヴィア共産党」『国際文化研究』15：239–251。

Weiner, Elaine.

2007 *Market Dreams: Gender, Class, and capitalism in the Czech Republic*.

Michigan: The University of Michigan Press.

Wingfield, Nancy.

2000 The Politics of Memory: Constructing National Identity in the Czech Lands, 1945 to 1948. *East European Politics and Societies* 14(2): 246–267.

2003 The Battle of Zborov and the Politics of Commemoration in Czechoslovakia. *East European Politics and Societies* 17(4): 654–681.

Witkovsky, Matthew.

2001 Tales of an Absent Monument: Views of the Monument to Liberation in Prague. Harvard: Harvard Design Magazine, No. 13.

Zacek, Josef.

1969 Nationalism in Czechslovakia. In *Nationalism in Eastern Europe*. Washington: University of Washington Press.

ザチェク、ヨセフ

1981 「チェコスロヴァキアのナショナリズム」『東欧のナショナリズム』、ピーター・シュガー、イヴォ・レデラー（編）、pp.135–192、刀水書房。

(2015年5月13日採択決定)